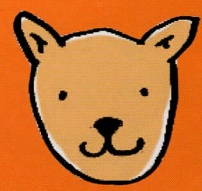


愛犬の
アトピー性皮膚炎で
お悩みの
飼い主さんへ

犬のアトピー性皮膚炎

正しい知識を
身につけよう!



犬のアトピー110番
<http://www.atopydog.com/>

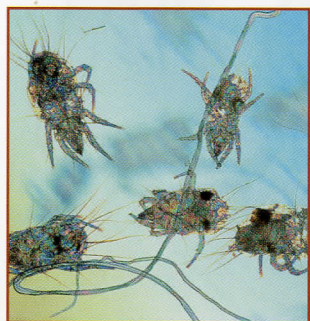
🐾 犬のアトピー性皮膚炎とは？

アトピー性皮膚炎は全てが解明できていない病気のひとつです。だからこそ、アトピー性皮膚炎について正しい知識を身につけて、適切に治療していきましょう。

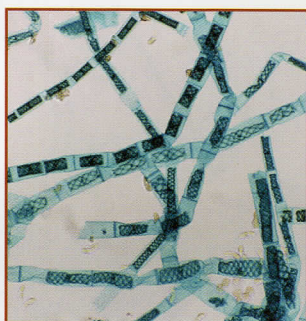
1. アレルギー性皮膚炎のうちのひとつ
2. 遺伝的な体質がある
3. 原因は、環境中にある。だから排除できない。

◆原因物質◆

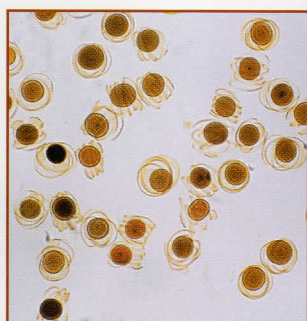
アレルギーとはダニ、カビ、花粉などのアレルゲン（＝異物、侵入物）に対して免疫が過剰反応してしまうために起こる病気です。



ダニ（ハウスダストマイト）



カビ



花粉

◆遺伝的にアトピー性皮膚炎になりやすい犬種◆

柴犬

シー・ズー

ゴールデン・レトリバー

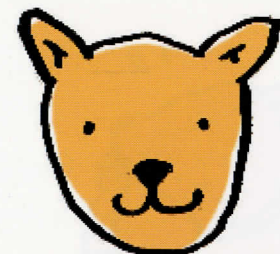
ラブラドル・レトリバー

シェットランド・シープドッグ

ウエスト・ハイランド・ホワイト・テリア

ダルメシアン

ボストン・テリアなど



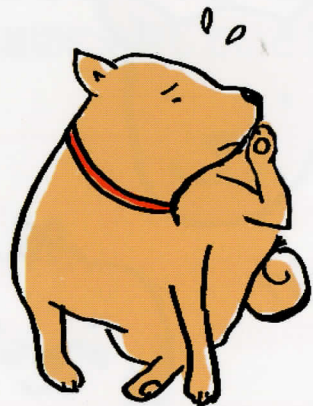
◆皮膚のバリア機能不全◆

皮膚が弱かったり潤いが不足するとアレルゲンが体に侵入しやすくなり、アレルギー反応が起きやすくなります。

皮膚トラブルを抱えた犬や生まれつき皮膚が弱い犬は、アトピー性皮膚炎になりやすいといえます。

このように、アトピー性皮膚炎の原因は、生活環境の中の排除しにくいアレルゲンと遺伝的な体質に大きく関わりがあります。

「かゆい」=「アトピー性皮膚炎」?



かゆみの強い皮膚疾患はいくつかあります。その中のひとつがアトピー性皮膚炎です。

だから、「かゆい」=「アトピー性皮膚炎」とは限りません。

●最初は「治るかゆい皮膚炎」から考えていきましょう!●

アトピー性皮膚炎はアレルギーの排除を完全にできないため、完治がむずかしい病気です。

もし、あなたの愛犬がアトピー性皮膚炎と診断されたら、一生つき合っていかなければなりません。

ですから、アトピー性皮膚炎を考える前に、原因さえ排除すれば治る皮膚疾患かどうかを考え、治るものから治療していきましょう。



7大かゆみの強い病気

- 1. ノミアアレルギー
ノミの寄生
- 2. 疥癬 (かいせん)
ダニが皮膚に穴を掘って寄生
- 3. 犬毛包虫症
毛包内にニキビダニが寄生
- 4. 膿皮症
皮膚の細菌感染
- 5. マラセチア
マラセチアという真菌に感染
- 6. 食物性アレルギー
アレルギーとなる食物に反応
- 7. アトピー性皮膚炎
環境中のアレルギーに反応

治る

なんとかなる

完治はむずかしい

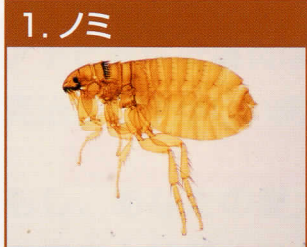
上記1.~6.のいずれでもない場合に、アトピー性皮膚炎の可能性が高くなります。

まずは「治る皮膚疾患」を治しましょう

前ページで「治る皮膚疾患」として紹介した、ノミアレルギー、疥癬（かいせん）、犬毛包虫症、膿皮症、マラセチアの治療には、アトピー性皮膚炎の治療で用いる、いわゆる「かゆみ止め」は使用しません。

原因がはっきりしている皮膚疾患なので、その原因を排除することによってかゆみ等の症状をなくしていきます。

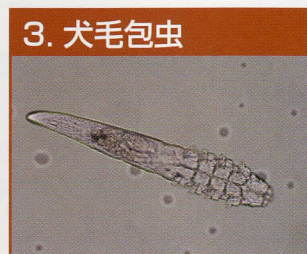
【原因と治療法】



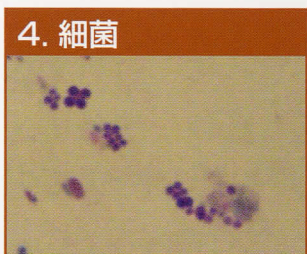
治療法 駆虫剤を使用



治療法 駆虫剤を使用



治療法 駆虫剤を使用



治療法
抗生物質を
内服。
抗菌シャ
ンプーを使用。



治療法
抗真菌薬を
内服。
抗真菌シャ
ンプーを使用。

【写真提供】ノミ:日本獣医生命科学大学 今井壯一教授 / 細菌・マラセチア:かどやアニマルホスピタル 門屋美知代院長

「食物性アレルギー」かどうか見極めましょう

かゆみをともなう皮膚炎の場合、食物性アレルギーの可能性も考えられます。食物性アレルギーはある特定の食材がアレルゲンとなっているので、まずは徹底した食事管理によって、食物性アレルギーかどうかを見極めます。食物性アレルギーと診断された場合は、原因となっている食材をつきとめながら、治療を進めます。

◆食事性アレルギーの診断◆

病院で処方される特殊なフード「療法食」と水だけを2ヶ月間与えます。

2
カ
月
後
に
...

良くなっていたら

食物性アレルギーと考えられます。しかし原因となる食材が特定できないので、療法食を継続していきましょう。

良くならない場合は

食物性アレルギーではない可能性が高いです。しかし皮膚に優しい食事を食べさせてあげましょう。

◆病院で処方される「療法食」とは？◆

アレルギーが起こらないように、たんぱく質を特殊加工したフードまたは今まで食べたことないであろうたんぱく質を使ったフードです。一般のお店で販売されている低アレルギーフードとは異なります。

● まだかゆみが残ってる場合は、アトピー性皮膚炎の可能性が高いです ●

愛犬の皮膚炎がノミアレルギー、疥癬（かいせん）、犬毛包虫症、膿皮症、マラセチア、食物性アレルギーでなかった場合には、アトピー性皮膚炎の可能性が非常に高くなります。

アトピー性皮膚炎は、初発年齢が若く、完治がむずかしい病気です。

でも、完治がむずかしいからといって、あきらめてはいけません。あきらめて何もしなければ、症状は悪化するっぽうです。

アトピー性皮膚炎と上手につき合って、かゆみをできる限り減らし、愛犬の苦痛を和らげてあげる治療を第一に考えましょう。

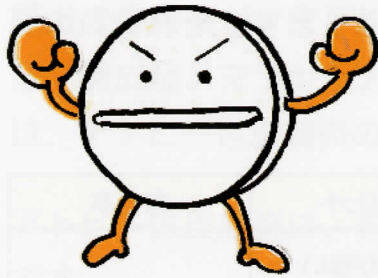


● アトピー性皮膚炎の主な治療法 ●

アトピー性皮膚炎の治療法はいくつかあります。それぞれのメリット・デメリットを理解しましょう。

治療法	メリット	デメリット	有効率
ステロイド (副腎皮質ホルモン)	<ul style="list-style-type: none"> ・即効性がある ・有効性が高い ・安価 	<ul style="list-style-type: none"> ・副作用が強い ・投薬を止めると再発する 	ほぼ100%
抗ヒスタミン剤	<ul style="list-style-type: none"> ・副作用が少ない ・安価 	<ul style="list-style-type: none"> ・効き目が弱い 	約30%
免疫抑制剤	<ul style="list-style-type: none"> ・ステロイドより副作用がない 	<ul style="list-style-type: none"> ・免疫を抑制する 	約70%
減感作療法	<ul style="list-style-type: none"> ・唯一の根本的治療 ・副作用が少ない 	<ul style="list-style-type: none"> ・開始時に特殊検査が必要 ・実施できる施設に限られる ・注射なので手間がかかる 	約70%
犬インターフェロン療法	<ul style="list-style-type: none"> ・副作用が少ない ・アレルギー体質改善の可能性 	<ul style="list-style-type: none"> ・注射なので手間がかかる 	約70%

ステロイド

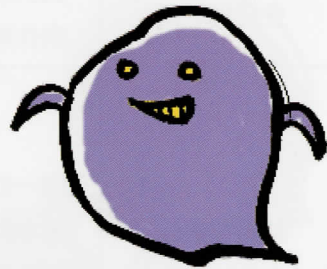


よく効くお薬ですが、あくまで対症療法です。アトピー性皮膚炎を治すのではなく、かゆみと炎症を抑える薬です。投与をやめれば再発します。

季節限定のアトピー性皮膚炎（例：花粉が原因）などでは、よく使われています。た

だ、1年中症状がある場合（例：ハウスダストマイトが原因）は、1年中投与することで副作用が出やすくなりますので、他の治療を検討していきます。

副作用がよく取りざたされていますが、うまく使えば非常に良いお薬です。副作用は、食欲が増す、飲水量と尿量が増える、胃腸が ağalır、肝臓に負担がかかる、ホルモンバランスが崩れるなどです。また、感染症に弱くなったりもしますので、様々な併発症を引き起こす可能性があります。獣医師の先生と投与計画をきちんと立てて、副作用を最低限に抑えましょう。



抗ヒスタミン剤

かゆみの元のひとつであるヒスタミンの働きを抑える作用があります。軽度のアトピー性皮膚炎に使用される場合が多いのですが、ただし単独で使用して効果が現れることはまれで、補助的に使う薬と考えたほうが良いでしょう。

免疫抑制剤

人間の臓器移植の際に拒絶反応を抑えるために使われている薬ですが、アトピー性皮膚炎にも効果があると分かってきたため、最近になってから、犬のアトピー性皮膚炎の治療に使われるようになりました。

アレルゲンに対して過剰に反応してしまう免疫の働きを抑制することにより、皮膚のかゆみや赤みなどを抑えます。皮膚だけでなく色々な臓器に作用するステロイドに比べ副作用は少ないです。

減感作療法

現在行われているアトピー性皮膚炎の治療の中で、アレルギーを根本的に解決するための治療法といえます。アレルギーの原因物質（アレルゲン）を避けるのではなく、逆に注射で体内に原因物質を取り込むことによって、体にその物質を慣れさせてアレルギー反応が起きないようにする治療法です。

開始前に原因物質を特定するための特殊なアレルギー検査を行う必要があります。

最初の1ヶ月間は2日に1回、注射をします。2週間目からは飼い主さん自身が自宅で注射をする場合が多いです。手間がかかるので、決められた回数の注射を受けさせることが可能かどうかを考える必要があります。治療開始時に強いアレルギー反応が出なければ、副作用はほとんど出ません。

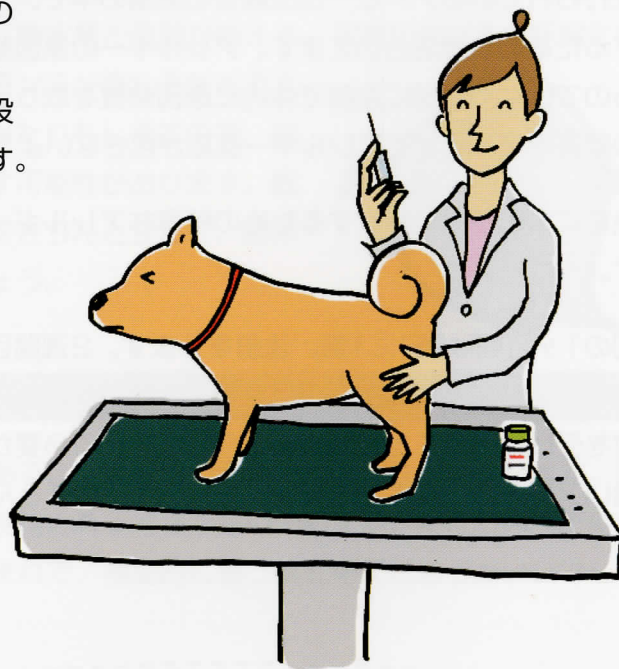
犬インターフェロン療法

最も新しい、犬のアトピー性皮膚炎の治療法です。犬のアレルギー体質改善を目的とした、アトピー性皮膚炎の症状を緩和するインターフェロン製剤を注射します。

インターフェロンは元々体内にある物質なので体にやさしく、副作用も少ないため、安心して使うことができます。

有効率は約70%です。かゆみの軽減のほかにも、アトピー性皮膚炎の特徴的な症状である掻破痕（引っ掻き傷の痕）、紅班（皮膚が赤くなる状態）、脱毛などの症状を総合的に改善する効果もみとめられています。

最初の1ヶ月間は頻回の通院が必要となります。効果が現れてきたら、投与間隔をあけていきます。



● 愛犬の生活環境をトータルで見直しましょう ●

病院での治療と合わせて、愛犬の生活環境をトータルで見直してあげると、効果的に症状がよくなります。毎日の生活のなかにあるアレルギーの原因物質であるアレルゲンを、愛犬の周りからできる限り排除しましょう。

● シャンプーしよう！

愛犬の体についたさまざまなアレルゲンを取り除くために、こまめにシャンプーしてあげましょう。使用するシャンプーは獣医師の先生と相談しながら、肌の状態に合ったものを選ぶといいでしょう。シャンプー後は、低刺激性保湿剤で保湿してあげるのを忘れなく。



● お掃除しよう！

ハウスダストやノミ・ダニの死骸を取り除くために、こまめにお家を掃除しましょう。もちろん愛犬のケージやベッドも毎日掃除してください。



● 低アレルゲン食を食べさせよう！

動物病院で処方される食事療法食や手作り食など、アレルゲンを含まない食事内容に切り替えてあげましょう。



治療しすぎないことも大事です

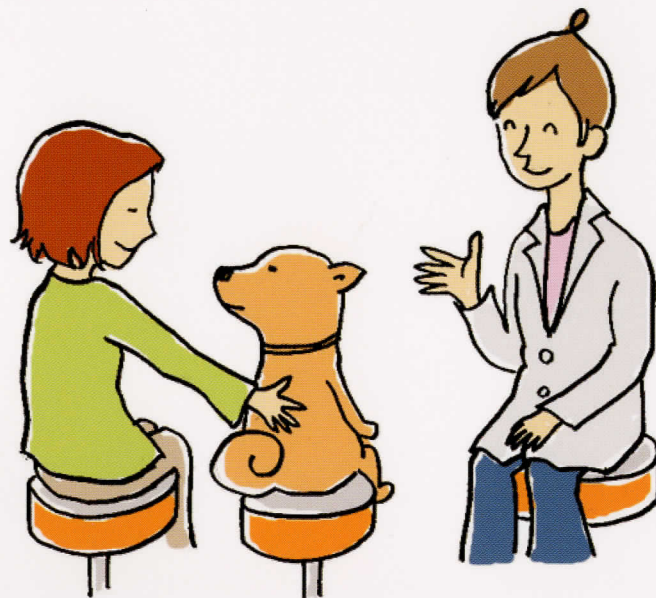
治療によってかゆみや赤みが減れば、愛犬の辛さも減るはずで
す。たとえかゆみや赤みが少し残っていたとしても、前よりも
症状が軽減されていればいいと考えることも大事です。

それ以上の症状改善を求めて治療を進めることによって愛犬の
体に負担がかかり、よけいに愛犬を苦しませてしまうかもしれ
ません。

アトピー性皮膚炎というむずかしい病気を理解し、上手につき
合っていくように心がけることが肝心なのです。



獣医師の先生とよく話し合うことが大切です



アトピー性皮膚炎の治療には根気がいりますし、ある程度の費
用がかかってしまうこともあります。また、治療法も複数あっ
て、それぞれにメリット・デメリットがあります。

獣医師の先生とよく相談して、それぞれのメリット・デメリッ
トを理解して、愛犬の症状とあなたの生活にあった治療法を選
択することが大事です。どの程度症状を軽くしてあげたいのか、
獣医師の先生とよく話し合っ、治療の目標を決めていくとい
いでしょう。